

妊娠中の母体の糖尿病と子どもの心血管疾患の早期発症： 40年の追跡による人口ベースのコホート研究

Maternal diabetes during pregnancy and early onset of cardiovascular disease in offspring : population based cohort study with 40 years of follow-up.

Yu Y et al

BMJ 367:l6398, 2019

目的 糖尿病母体からの出生児は CVD 早期発症リスクが高くなるという仮説を立て、デンマークの健康情報データベースを利用しコホート研究が行われた。

方法 1977~2016年にデンマークで生まれた247万5,209人のうち243万2,000人が対象となり、出生時から初回CVD診断、死亡、他国への移住、2016年12月31日のいずれかまで追跡された。

結果 243万2,000人のうち糖尿病母体からの児は5万4,864人(1型糖尿病2万2,055人、2型糖尿病6,537人、妊娠糖尿病2万6,272人)いた。追跡期間中に非糖尿病母体から生まれた9万1,311人と、糖尿病母体からの1,153人(1型糖尿病531人、2型糖尿病261人、妊娠糖尿病361人)がCVDと診断された。非糖尿病母体の児を基準にすると、糖尿病母体の児のCVD発症ハザード比は1.29であった。糖尿病母体の児の40歳までのCVD累積発症率は13.07%で、非糖尿病母体の児

との差は4.72%であった。妊娠前から糖尿病であった母体の児のCVDのハザード比は1.34で、1型糖尿病では1.31、2型糖尿病では1.39と型による発症率の差は認めなかった。妊娠糖尿病母体の児では1.19であった。CVDのなかで高血圧、深部静脈血栓、肺塞栓などのリスク上昇が大きく、糖尿病母体の子どものCVD発症率は20歳未満でも、20~40歳でも上昇していた。糖尿病合併症のある母体の児のCVDリスクは合併症のない母体の児より高く、CVD歴ありの母体の児はCVD歴のない母体の児より高かった。

結論 糖尿病母体(特にCVD歴、合併症あり)の児は40歳までにCVDを発症するリスクが高いため、妊娠可能年齢女性の糖尿病の予防や管理により次世代のCVDリスクを減らせる可能性がある。

(東北医科薬科大学産婦人科学教室 酒井啓治 抄)

超低出生体重児の未熟児網膜症治療に対するラニビズマブとレーザー療法(RAINBOW)：非盲検ランダム化比較試験

Ranibizumab versus laser therapy for the treatment of very low birthweight infants with retinopathy of prematurity (RAINBOW) : an open-label randomised controlled trial.

Stahl A et al

Lancet 394:1551-1559, 2019

背景 抗VEGF薬のラニビズマブの硝子体注射とレーザー光凝固治療の有効性と安全性を比較するランダム化比較試験が行われた。

方法 比較試験には26カ国の87施設が参加し、出生体重1,500g未満で両眼ともに未熟児網膜症のzone Iのステージ1+, 2+, 3, 3+, zone IIのステージ3+,あるいはaggressive posterior ROPと判定された患者が対象で、両眼ラニビズマブ0.2mg単回投与、両眼ラニビズマブ0.1mg単回投与、レーザー治療の3群に割り付けられた。主要評価項目はラニビズマブ0.2mgのレーザー治療に対する優越性で、24週後までの両眼に活動性網膜症がない治療成功率とされた。

結果 2015年12月31日~2017年6月29日に225人が参加し、ラニビズマブ0.2mg群74人、0.1mg群77人、レーザー群74人に割り付けられた。225人のうち24週後に評価完了したのは201人であった。治療

成功率はレーザー群68人中45人(66%)と比較し0.2mg群70人中56人(80%)オッズ比2.19(95%CI: 0.99-4.82)、0.1mg群76人中57人(75%)オッズ比1.57(95%CI: 0.76-3.26)であった。ラニビズマブ0.1mgと0.2mg群のオッズ比は1.35(95%CI: 0.61-2.98)であった。24週時点で、活動性ROP患者は0.1mg群の3人のみであった。構造的アウトカム不良例は0.2mg群1人と0.1mg群5人、レーザー群7人であった。死亡例はすべて早産に伴う合併症で、各群とも4人であった。

結論 これらの結果より、有意差はないがレーザー治療に比べ0.2mgラニビズマブのほうが治療成功率は高い傾向を示し、好ましくない構造的変化は少なかった。

(東北医科薬科大学産婦人科学教室 酒井啓治 抄)